奈良佐保短期大学における音楽教育関連科目のカリキュラムに関する一考察（2）
－保育者および小学校教員養成機関におけるピアノ・グレード曲の改訂について－

A Study of the Curriculum of the Music Subjects in Nara Saho College(2)
－A Consideration on the Revision of Piano Grade in Training Courses of Nursery and Elementary School Teacher－

多田 純一　山下 玲子　玉井 奈摘　大城 弓恵　大西 有紀　紺谷 志野
TADA Junichi YAMASHITA Reiko TAMAI Natsumi OSHIRO Yumie ONISHI Yuki KONTANI Shino

キーワード：ピアノ指導法，カリキュラム，保育者，教員養成，ピアノ・グレード
Key Words：Piano Learning，Piano Teaching Method，Curriculum，Nursery Teacher，Piano Grade

1. はじめに

1-1 本論の目的

本論の目的は次の 2 点である．第 1 の目的は，昨年の研究紀要にて研究報告として示した [1)]，奈良佐保短期大学（以下，本学とする）における音楽関連科目のカリキュラムとピアノ指導法の改善点について，改善内容と現状の経過報告をすることである．そして第 2 の目的は，改善した内容について，さらに改善する必要性の有無を考察することである．前任の音楽専任教員が構築した音楽教育システムを踏襲しつつ，授業を実施した上で必要であると思われる改善点を提案した．結論では「技術的困難を避けるのではなく，克服することで確実なピアノ実技能力を身に付けることを目標としたい」と述べている [2)]．ここでは「改善」という言葉を使用してはいるが，それは前任者が構築したシステムを否定するものではなく，あくまで後任者の視点から見た音楽教育に対する考え方を部分的に導入するという意味である．全体的なシステムは変わらない．その改善の取り組みのひとつとして，ピアノ・グレード曲の改訂が挙げられ，本論では改訂の内容と意義，そして，主に保育者として必要なピアノ演奏の技術について考察する．ここで重要なことは，改善を試みた結果，その改善がよい影響を及ぼしたのか，あるいは改善の必要はなかったのか，について経過観察することであろう．その上で，さらに改善の余地があれば改善し，改悪していればもとに戻す必要がある．そのためには，ピアノ・グレード曲の改訂が行われた学年が卒業するまでを一区切りとして見る必要があり，本論の位置づけは，2019 年に入学した学生が 2 年生になって実施される「保育内容（表現・音楽）」について，どのような成果を得ることができたのか，を考察するための経過報告となる．

ここで，本学の音楽教育に関する科目について概観する．「音楽基礎演習Ⅰ」，「音楽基礎演習Ⅱ」，「音楽Ⅰ」から「音楽Ⅳ」，「保育（表現・音楽）」[注 1)] で構成されており，いずれの科目も単体として独立しているが，それぞれが密接な関連性を保っている．1 年生前期で履修する「音楽基礎演習Ⅰ」は，「音楽Ⅰ」で行われるピアノのレッスンにて必要な読譜力を身に付けることを目的としている．1 年生後期で履修する「音楽基礎演習Ⅱ」はその延長線上にあり，レベルアップして行われる「音楽Ⅱ」の単位取得を補助する役割を担うとともに，2 年生前期で履修する「保育（表現・音楽）」で中心とする弾き歌いの技術に必要な左手の主要三和音が自然に打鍵できることを主な目的としている．また，小学校教員免許の取得を目指す教育コースの学生は，これらの科目以外に「音楽科教育法」の単位を取得する必要がある．この場合にも小学校学習指導要領に示されている歌唱の共通教材[注 2)] の簡易伴奏において主要三和音の習得は有益である．2 年生前期の「音楽Ⅲ」および

後期の「音楽Ⅳ」は，選択科目として，ピアノ演奏の技術の向上を目指す学生が履修する．

1-2 先行研究

上記に概観した保育者および小学校教員養成機関における音楽教育において，どのようなアプローチでピアノ教育を行うのか，という研究はさまざまに行われている．前稿では2018年に絞っても69件の論文が見られると報告した[3)]．同様の方法でCiNii（NII学術情報ナビゲータ［サイニィ］）において，「保育 ピアノ」で2019年を検索すると，61件が表示される[注3)]．2017年では80件見られることを鑑みると減少している．しかしながら，それでもなお61件もの論文が見られるのは[注4)]，保育者および小学校教員養成機関の入学者にピアノ未経験者の増加がみられることに加え，現場で望まれるピアノ演奏技術の高さとの乖離に要因のひとつを見ることができる．和田垣究らが2017年に行った大阪市立幼稚園長会における大阪市立54園の園長に対してのアンケート調査では，「学生時代に修得しておくべきピアノ技能はどのレベルまでが必要だと感じますか？」という質問に対し「半数以上である65%の園長が，ブルグミュラー25の練習曲修得程度のピアノ技能が必要と回答しており，バイエル修得レベル0%，ソナチネ・ソナタ修得レベル32%，それ以上3%，という結果であった」と報告している[4)]．この調査結果は公立幼稚園園長としての見解であり，保育者養成機関として望まれる技術としてはあくまで「理想的」な範囲であるととらえることが可能であろう．なぜならば，多くの論文において，ピアノ未経験あるいは短期間のみの経験者にとって，ピアノ技術の習得が，いかに困難なことであるかが述べられているからである．

いくつかの例を挙げると，保育者および教員養成課程におけるピアノ学習のコスト認知について考察された別府祐子と大野内愛の研究では，「ピアノの初心者が増加していること，在学期間中という時間的制約の中で，一定の技能を身に付ける必要があることなどに，その困難さがある」[5)]と指摘した上で，4年制大学では98名のうち19名，短期大学では40名のうち11名が大学入学前までの鍵盤楽器の学習未経験者であることを示している[6)]．保育現場と養成校が連携して「保育者に求める音楽力」について協働研修を行い，その内容を考察した三宅浩子らの研究では，宮崎県および鹿児島県の私立幼稚園協会・連合にて実施されている「登録試験」において，「近年は、登録試験の課題曲を弾けるレベルにまで到達できず、ピアノ実技試験の受験が困難になる学生も見られるようになってきた」[7)]と指摘している．その実技試験は『バイエル・ピアノ教則本』[注5)]（以下，『バイエル』とする）80番から100番（83，84，86，92を除く）から当日1曲指定に加え，指定された童謡2曲から当日1曲指定となっている[8)]．『バイエル』についてはどの作品が指定されるかわからないため，入学時点でピアノ学習が未経験な学生が多くなってきている近年では，ハードルが高いことは明瞭である．緒方満による比治山大学現代文化学部子ども発達教育学科における音楽教育の成果と課題を考察した研究では，2018年度の「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」の履修者71名のうち，「初心者」は39%の26名，「初心者に近い者」は18%の14名，「1年未満の経験者」は18%の13名となっている[9)]．アンケートの自由記述について「「ピアノが全く弾けません」「ピアノが不安です」「今まで一切ピアノに触ったことがないので不安」「全然弾けないので大学でがんばります」などの初心者層の率直な思いが読み取れた」と述べると同時に「初心者の学生は不安を隠しきれない状況にある」[9)]と分析している．

これらの本学および先行研究にみられる現状を踏まえ，学生が無理のない範囲で学ぶことができ，かつ保育者および小学校教員として必要なピアノ演奏技術を身に着けるため，ピアノ・グレード曲の改訂を行った．次章以降においてその内容と学習の意義を考察する．

2. ピアノ・グレード曲の改訂

2-1『バイエル・ピアノ教則本』からの課題曲の改訂

本学では「音楽Ⅰ」から「音楽Ⅳ」までのピアノ実技においてグレード制を取り入れており，全体としてはグレード1からグレード11までの11段階で構成されている．本節では『バイエル』からの課題曲の改訂について考察するため，『バイエル』からの課題曲を

その構成の中心としているグレード 1 からグレード 6 までの一覧を，以下に示した．表 1 は【改訂前】，表 2 は【改訂後】である．

表 1 【改訂前】ピアノ実技のグレード表（初級および中級，多田・紺谷 2018 より借用）

		『バイエル』の課題番号									備考
初級	グレード 1	4	5	11	14	17	18	21	31	39	グレー塗 3 曲が必須
	グレード 2	46	48	50	52	55	57	58	59		グレー塗 5 曲が必須，かつ別途選択曲 1 曲
	グレード 3	60	62	64	66	72	73	75	77		グレー塗 6 曲が必須，かつ別途選択曲 1 曲
中級	グレード 4	78	83	85	89	92	93	94			グレー塗 4 曲が必須，かつ別途選択曲 1 曲
	グレード 5	80	81	82	88	91	103				左記のうち 4 曲を選択，かつ別途選択曲 2 曲
	グレード 6	97	98	100	102	104	105				左記のうち 1 曲を選択，かつ別途選択曲 4 曲

表 2 【改訂後】ピアノ実技のグレード表（作成：山下）

		『バイエル』の課題番号									備考
	グレード 1	7	8	14	15	16	21	29	31	39	グレー塗全 9 曲が必須
	グレード 2	44	46	48	52	55	59	※44 番は先生パートと連弾			グレー塗全 6 曲が必須，かつグレード認定課題曲 1 曲
	グレード 3	60	62	67	72	73	89				グレー塗全 6 曲が必須，かつグレード認定課題曲 1 曲
	グレード 4	78	83	84	85	93	94				グレー塗全 6 曲が必須，かつグレード認定課題曲 1 曲
	グレード 5	80	81	82	88	91	103				グレー塗全 6 曲が必須，かつグレード認定課題曲 1 曲
	グレード 6	97	98	100	101	102	104				グレー塗全 6 曲が必須，かつグレード認定課題曲 1 曲

まず，【改訂前】に見られる初級・中級の枠組みについて検討する．【改訂前】では，グレード 1 からグレード 3 を初級，グレード 4 からグレード 6 を中級，そして『バイエル』修了後のグレード 7 以上を上級と位置づけている．このことは級を進んでいく意欲や達成感を得ることにつながり，継続的な学習に効果的である．一方，初級とした枠組みが，入学時にピアノ学習未経験者にとって，中級以上へ進むハードルを必要以上に高く意識させてしまう可能性が有る．グレード制が本来持つ，一段一段，段階を進んでいくイメージに従い，無理なく向上心につないで取り組んでいくよう，今回はこれを省いた．表 2【改訂後】では，この欄を空欄にしている．

次に，『バイエル』課題曲における“必須”，或いは“必須ではない”という区別について検討する．【改訂前】の『バイエル』課題曲には，グレー塗りの必須課題曲とグレー塗りではない課題曲がある．このグレー塗りではない曲，すなわち必須ではない課題曲は，実際はどのように取り入れられているかに注目していくと，グレード 1 からグレード 4 までの段階とグレード 5 およびグレード 6 の段階との間で，大きな違いが見られる．グレード 1 からグレード 4 まででは，多くの場合ピアノ実技担当教員が，学生各々の演奏技術に応じてその必要性を判断し，学生にその旨を明示した上で，必須課題曲にプラスする方法で取り入れられる．しかし，必須課題曲のないグレード 5 およびグレード 6 では，教員は課題曲 6 曲の中から必要性を判断した曲を勧め，そこに学生の好みや苦手意識の有無が加味された選曲になる．学生本人の好みや意識を尊重することで良い効果を生むことが多い反面，躓きを回避しようとする可能性が生じ，そのことは確実な演奏技術を習得できないことにもつながる．グレード 5 およびグレード 6 の段階で，どの『バイエル』課題曲を選択し，どの『バイエル』課題曲を選択しないかで，演奏技術の習得内容に違いが生じるのである．本学における音楽関連科目は，それぞれの内容が密接に絡むカリキュラムとなっているので，他にも身につけるべき演奏技術を習得できる機会は設けられているが，今回の【改訂後】では『バイエル』課題曲を全て必須にすることで，習得する演奏技術の内容

を等しくした．

他に，【改訂前】には別途選択曲が設けられているが，この別途選択曲は【改訂後】ではグレード認定課題曲のことである．それについては後述する．

2-2『バイエル・ピアノ教則本』課題曲の特徴および学習の意義

本節では，【改訂後】のグレード表から読み取れる，選択された課題曲の特徴，そして，それらの曲を学ぶことで得られるピアノの技術について考察する．【改訂前】はピアノ学習未経験者の苦手意識を考慮することで，伴奏形ではない音型の演奏技術を学ぶ作品が充分に取り上げてられていなかった側面が見られる．そのため，No.16 を入れることで確実な読譜力へのつながりと伴奏形だけでない左手の指の運動につながり，No.60 のポリフォニーへの対応も可能にするように配慮した．また，ハ音からト音の 5 度音程を全音符から 8 分音符までさまざまな音価で示されている No.44 を取り入れた．教員と連弾することで正しい音価を確認できることに加え，連弾の楽しさをグレード 2 の冒頭で知ることができる点が特徴的である．

和音，和声機能，伴奏形を学習するのに必要な No.46，48，52，55，59 は必須曲として残した．これらを学ぶことにより，【改訂前】のグレードにおいて意識されていた 2 年生で履修する「保育内容（表現・音楽）」における弾き歌いの技術に必要な左手の伴奏付けおよび主要三和音の基礎を身につけることが担保されている．

こどものための作品の，弾き歌いの重要な要素として付点のリズムが挙げられるが，【改訂前】は付点のリズムの作品が「音楽Ⅱ」単位認定の最低ラインとなるグレード 3 までに必須課題に入っていなかった．幼稚園実習の第 2 段階では，ほぼ必須の作品と言える，天野蝶作詞，一宮道子作曲《おべんとう》，《おかえりのうた》，吉岡治作詞，越部信義作曲《せんせいとおともだち》はいずれも付点のリズムである．そのため，グレード 3 に No.89（図 1），グレード 5 で No.88，グレード 6 で No.98（図 2）を取り入れることにより，段階的に付点の技術を習得し，弾き歌いの技術習得への自然な移行につなげることができると思われる．

『バイエル』という教則本そのものに短調の作品が少ないことはよく指摘される．【改訂後】では，No.60，91（図 3），93 の 3 曲を課題曲に含むことで，短調の作品に慣れ親し

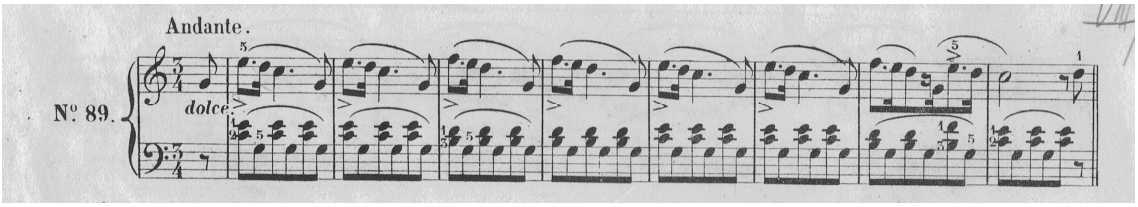

図 1　『バイエル』No. 89　第 1 小節から 8 小節　初版（多田個人蔵）

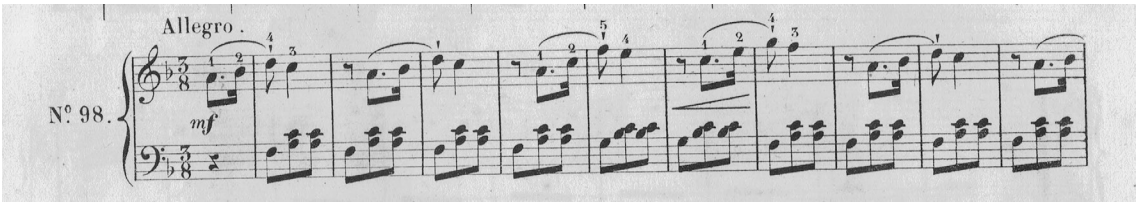

図 2　『バイエル』No. 98　第 1 小節から 10 小節　初版（多田個人蔵）

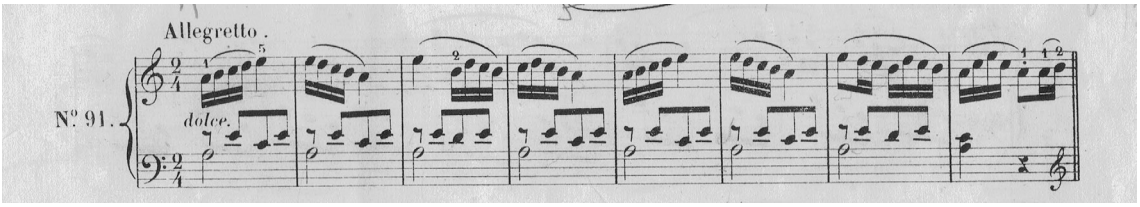

図 3　『バイエル』No. 91　第 1 小節から 8 小節　初版（多田個人蔵）

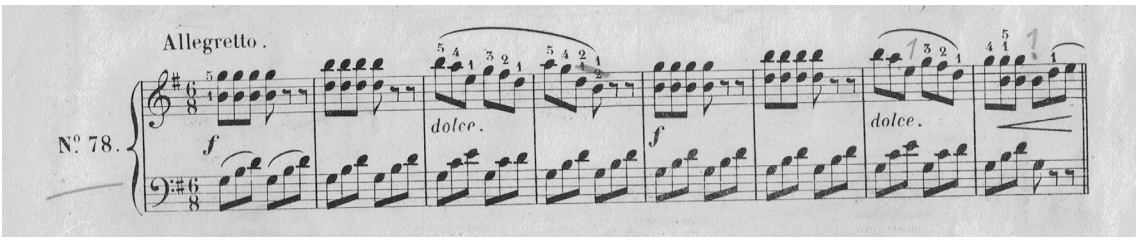

図 4　『バイエル』No. 78　第 1 小節から 8 小節　初版（多田個人蔵）

むことができるように工夫した．また，それと同時に，『バイエル』の中でも一般的によく知られており，演奏される機会の多い No.78（図 4）を必須とした．

さらに重要な点として，No.80 から 82 の 3 つの作品がグレード 5 で課題曲となった点が挙げられる．No.78 のト長調の調号であるシャープ 1 つに加え，No.80 はニ長調，No.81 はイ長調，No.82 はホ長調とシャープが 1 つずつ増えていく．【改訂前】では，そのうち 1 作品を選択するのみであったが，【改訂後】ではすべての作品を課題曲にすることで，調性・装飾音・連打・転調などのさまざまな音楽的要素を学ぶことができる．

また，グレード 6 で指定されている No.100，101，102，104 は今までの集大成となる締めくくりにふさわしい音楽的要素が盛り込まれている．これらを必須課題にすることで，真の意味での『バイエル』修了程度の演奏技術を習得したと言えるのであり，その技術はそのまま弾き歌いで必要とされるピアノ演奏の技術へとつながる．

2-3『ブルクミュラー25 の練習曲』以降の課題曲の改訂および学習の意義

本学では『バイエル』の次の段階として，『ブルクミュラー25 の練習曲』，続いて『ソナチネ・アルバム』を中心にグレードを設定している．

まず，『ブルクミュラー25 の練習曲』（以下，『ブルクミュラー』）に関するグレードの改訂について考察する．『ブルクミュラー』はピアノを学ぶ初心者のために書かれた教本である．25 曲いずれの曲もねらいが明確で，また全曲に表題がついていることで曲のイメージを捉えやすく，「弾く」ことから「表現する」ことへの意識の向上が期待できる．【改訂前】ではグレード 4 及びグレード 5 の 2 つのグレードで『バイエル』と並行して『ブルクミュラー』を学んでいたが，【改訂後】はグレード 6 において『バイエル』修了時に先取りとしてまず 1 曲を学び，続くグレード 7 及び 8 で『ブルクミュラー』を軸として学ぶように変更した．【改訂前】と比べて曲数は大きく変化していないが，単体で扱うことにより，『ブルクミュラー』に集中して取り組むことができる．またシューマン等の指定曲を外すことで，より自由な選曲が可能となった．それにより『ブルクミュラー』の曲数を増やす，又は他の自由曲に取り組むなど，学生の必要に応じた曲を選択できるようになった．『ブルクミュラー』は『バイエル』に比べると曲の長さも長く，表現の指示も細かく書かれている．『バイエル』修了後に取り組むことで，これまでに学んだ基本のテクニックを，無理なく発展させることができると考える．

次に，『ソナチネ・アルバム I』に関するグレードの改訂について考察する．【改訂前】はグレード 8 及び 9 で『ソナチネ・アルバム I』または『ソナチネ・アルバム II』から急速楽章を学び，グレード 10 で『ソナチネ・アルバム I』または『ソナタ・アルバム I』よりソナタの第 1 楽章を学ぶこととしていた．指定曲より選択するスタイルは提案としての意味は大きいが，それに縛られてしまい緩徐楽章を学ばずに修了することがほとんどであった．今回，演奏技術の向上はもちろん，音楽的な理解を深めるためにも，ソナチネを全楽章学ぶことと大きく改訂をした．【改訂前】と比べると触れる楽曲の数は減少している．しかし全楽章を学ぶことでそれぞれの楽章の形式と特徴を学ぶことができ，より楽曲への理解が深まるのではないかと考える．また【改訂後】はソナタを必修課題から外している．これは数多くの楽曲に触れることよりも，ソナタを含め，より幅広い範囲から楽曲を選び学習することが必要ではないかと考えたためである．グレード 10 まで進んでいる学生は大半が入学前までのピアノ経験者である．場合によっては自身の技術に満足し，取り組みが

停滞する学生も見受けられる．楽曲選択の自由度が増すことで学習意欲の向上を図り，更なる演奏技術の習得に繋がることが期待できる改訂であると考える．

3. グレード認定課題曲の改訂

3-1 グレード認定課題曲の改訂方針

本学ではピアノ初心者に対し『バイエル』に主軸を置きつつ，『バイエル』では不充分な点を補う，いわゆる副教材のような役割として選択曲を設定している．先述の通りグレード1は『バイエル』9曲をもってグレード認定となるが，グレード2からグレード6に関しては『バイエル』に加え，選択曲から 1 曲もしくは同レベルの自由曲を 1 曲習得することでグレード認定となる．今回のグレード認定課題曲の改訂に伴い，各グレードにおける新設した選択曲とその選曲基準については下記のとおりである．

グレード 2 のグレード認定課題曲は，フランス民謡《きらきら星》，カミーユ・サン=サーンス Camille Saint-Saëns（1835-1921）作曲の《ライオンの大行進》，外国曲（作曲者不詳）《みつばちマーチ》，アメリカ民謡《聖者が街にやってくる》，イギリス民謡《なかよしこよし（ロンドン橋が落ちる）》，ドイツ民謡《さよなら》より 1 曲選曲，または同レベルの自由曲 1 曲となっている．選曲基準は「保育現場で使用することができる作品」である．幼稚園や保育園の生活のうたとしてはもちろん，発表会や運動会で使用出来る曲を複数選曲した．《みつばちマーチ》では「四分音符＝歩く・八分音符＝走る」のようにリトミック等の身体表現に使用も可能であり，実用的である．また，保育士採用試験でのピアノ実技試験に行進曲が出題されることも多く，その対策としても兼ね備えている．一方で，《ライオンの大行進》の選曲理由は，前述の通り『バイエル』には少ない短調の曲であること，オリエンタルな響きを持つ表題通りの力強い曲想であることが挙げられる．それらの要素は学生の学習意欲の喚起と共に，終始同じ音・同じリズムで構成されていることから，左手のヘ音記号の苦手意識からの克服も狙いに含まれている．

グレード 3 のグレード認定課題曲は，オーストリア民謡《かわいいアウグスティン》，トマス・ヘインズ・ベイリーThomas Haynes Bayly（1797-1837）作曲《むかしむかし》，ヨハン・クリーガーJohann Krieger（1651-1735）作曲《メヌエット》イ短調，カール・マリア・フォン・ウェーバーCarl Maria von Weber（1786-1826）作曲《人魚のうた》，ルイス・ケーラーLouis Köhler（1820-1886）作曲《スワビア民謡》，ストリーボック（本名はジャン・ルイ・ゴバールツ Jean-Louis Gobbaerts, 1835-1886）作曲《遠い鐘の音》より 1 曲選曲，または同レベルの自由曲 1 曲となっている．選曲基準は「演奏される機会が多いこどものためのピアノ曲を学べる作品」である．小学校音楽科のリコーダー二重奏曲として《メヌエット》イ短調が用いられることが多く，この曲を学習することは小学校教諭免許取得希望者にとって有意義である．また，《かわいいアウグスティン》や《スワビア民謡》も初心者用のピアノ併用曲集等に掲載されることが多く，ピアノを学習する者にとって定番の曲である．こういった機能和声に基づく音楽を体得することは，創造力（作曲）の基盤となり，合奏における簡単なパート譜の作成やアレンジ力として教育現場での実践に活かせるのである．

グレード 4 のグレード認定課題曲はクリスティアン・ペツォールト Christian Petzold（1677-1733）作曲（バッハ伝）《メヌエット》ト長調，《メヌエット》ト短調，ヨハン・ゼバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach（1685-1750）作曲《ミュゼット》，アントン・ディアベリ Anton Diabelli（1781-1858）作曲《アレグレット》，ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven（1770-1827）作曲《エコセーズ》，ヨハネス・ブラームス Johannes Brahms（1833-1897）作曲《ワルツ Op.39-15》（簡易編曲ト長調）より 1 曲選曲，または同レベルの自由曲 1 曲となっている．選曲基準は「バロック，古典派，ロマン派のさまざまな様式の作品にふれること」であり，ピアノ演奏が単に指の運動一辺倒になることを防ぎ，こどもの心に直接触れる保育士の演奏の重要性を示している．さまざまな時代様式の音楽を学び，保育士自身の感性を磨くことは，表現力養うこととなり，ひいてはこ

どもの音楽表現において豊かさをもたらすのである．対位法を用いた同主調関係にある 2 つの《メヌエット》や，気品に満ちた叙情あふれる《ワルツ Op.39-15》を学ぶことによって技術面，表現力のどちらも欠かすことなく勉強できる構成となっている．

グレード 5 のグレード認定課題曲は，ウィリアム・ギロック William Gillock（1917-1993）作曲の《教会の鐘》,《サラバンド》,《フランス人形》より 1 曲選曲，または同レベルの自由曲 1 曲となっている．ここで指定されているギロックの 3 曲は，【改訂前】は 1 つ下のグレード 4 に設定されていた．3 曲とも学生の間で人気が高く，選択される機会が多かったが，習得するのに時間がかかり『バイエル』が進まないという問題を抱えていた．そこで，この 3 曲を 1 つ上のグレードに設定することでグレード 4 をスムーズに修了し，発表会で 1 つ上のグレードの作品を選択するという仕組みに変更した．そこには学生のモチベーションを継続させる狙いがある．また，仮に「音楽Ⅱ」においてグレード 5 に届かずグレード 4 で終わってしまっても，2 年生の選択科目である「音楽Ⅲ」の履修意欲に繋がるのである．選曲基準は「ペダルを使用し，音色および様々な表現方法を学ぶ」ことであり，右手伴奏で中間部には左右の交差・跳躍のある《教会の鐘》，ゆったりとしたテンポで長いフレーズをうたわせる《サラバンド》，旋律の両手分担を感じさせない奏法が必要な《フランス人形》いずれもペダルを使用し，美しい音色による演奏が求められる．これらの作品，あるいは同レベルの作品を学ぶことで，保育現場においてピアノ演奏または伴奏をする際に，効果的にペダルを使用し，表現方法を豊かにすることにつながるのである．

3-2「音楽Ⅰ」における発表会で演奏された作品の傾向と改訂の意義

本学の「音楽Ⅰ」では，グレード 2 の課題曲を修了することが単位認定の条件となっている．学期末の第 15 回目を「発表会」と題した演奏会形式で行っており，学生はグレード 2 以上のグレード認定課題曲（グレード 3 以上の『バイエル』からも選曲可）の中から 1 曲を選び，暗譜で演奏する．ピアノ初心者にとっては人前で演奏する初めての経験であると同時に，今後の採用試験のリハーサルと成り得る重要な演奏の場である．

今年度の「音楽Ⅰ」の発表会には 64 名の学生が出演し，グレードが認定された．1 名のみが追試験となったが，最終的にはグレードが認定され，単位認定された．演奏された作品と選曲者数を以下の表に示した（表 3）．

グレード別の選曲者数は，グレード 2 が 15 名，グレード 3 が 17 名，グレード 4 が 9 名，グレード 5 が 8 名，グレード 6 が 3 名，グレード 7 が 2 名，グレード 8 が 3 名，グレード 9 が 5 名，グレード 10 が 2 名であった．

グレード 2 の曲目からは，《みつばちマーチ》が最も多く選ばれ，その次にフランス曲《きらきら星》が続いた．《きらきら星》以外の作品は，グレード改訂によって今年度から新たに加えられたピアノ作品である．保育現場で使用することが出来る作品に取り組むということは，ピアノ初心者にとって大きな励みとなると思われると同時に，《みつばちマーチ》が多く選曲されていることは，学生自身が 1 年生の時点で，すでに保育現場を想定していることを示していると考えて問題はない．

グレード 3 の曲目からは，《人魚のうた》が最も多く選ばれ，その次に《メヌエット》イ短調，《むかしむかし》，《かわいいアウグスティン》が選ばれた．グレード 2 の作品に比べると，音高移動や対位法的な両手の動きなどが使用され，よりピアノ曲らしい作品となっている．バロック作品《メヌエット》イ短調が多く選ばれている点に着目したい．その理由としては，「音楽Ⅰ」と並行して行われている「音楽基礎演習Ⅰ」の授業の影響が窺われる．基本的な和声進行や左手の主要三和音を学ぶことによって，両手を動かしてピアノを演奏することに少し余裕をもって取り組めるようになってきた学生は，自身が弾ける範囲というよりもむしろ，作風に対する興味で選曲していることがわかる．

グレード 4 の曲目からは，《アレグレット》，《ワルツ Op.39-15》が複数選曲されているが，ペツォールト（バッハ伝）作曲《メヌエット》ト長調や《メヌエット》ト短調，《ミュゼット》，《バイエル》60 番，67 番など幅広い作品から選ばれている．グレード 4 のピアノ曲は，『バイエル』以外はグレード改訂によって一新された曲目ばかりである．

表 3　2019 年度「音楽Ⅰ」発表会　演奏曲目（作成：紺谷）

グレード	演奏曲	選曲数
2	フランス曲《きらきら星》	3
	サン＝サーンス《ライオンの大行進》	2
	ミラー《みつばちマーチ》	5
	アメリカ曲《聖者が街にやってくる》	2
	イギリス曲《なかよし こよし（ロンドン橋が落ちた)》	2
	追試課題曲	1
	※「音楽Ⅰ」単位取得の前提グレード	
3	オーストリア民謡《かわいいアウグスティン》	2
	ベイリー《むかしむかし》	3
	クリーガー《メヌエット》イ短調	3
	ウェーバー《人魚のうた》	5
	ケーラー《スワビア民謡》	1
	ストリーボック《遠い鐘の音》	1
	バイエル 60	1
	バイエル 67	1
	※「音楽Ⅱ」単位取得の前提グレード	
4	ペツォールト（バッハ伝)《メヌエット》ト長調	1
	ペツォールト（バッハ伝)《メヌエット》ト短調	1
	バッハ《ミュゼット》	1
	ディアベリ《アレグレット》	3
	ブラームス《ワルツ Op.39-15》(簡単編曲ト長調)	2
	バイエル 78	1
5	ギロック《サラバンド》	2
	ギロック《フランス人形》	3
	バイエル 80	1
	バイエル 81	1
	・その他　モーツァルト《ロンド》ハ長調	1
6	ブルクミュラー　1.《素直な心》	1
	ブルクミュラー　2.《アラベスク》	1
	バイエル 100	1
7	ブルクミュラー　10.《優しい花》	1
	ブルクミュラー　15.《バラード》	1
8	ブルクミュラー　20.《タランテラ》	1
	・その他　ブルクミュラー（18 の練習曲）　9.《朝の歌》	1
	・その他　フィールド《ノクターン》	1
9	ソナチネ・アルバムⅠ　No.1　第 1 楽章	1
	ソナチネ・アルバムⅠ　No.1　第 3 楽章	1
	ソナチネ・アルバムⅠ　No.9　第 1 楽章	1
	ソナチネ・アルバムⅠ　No.10　第 1 楽章	1
	ソナチネ・アルバムⅠ　No.14　第 1 楽章	1
10	ショパン《ワルツ》Op.34-2（ショパンの作品から任意の 1 作品）	1
	・その他　モーツァルト《ソナタ》ハ長調 第 1 楽章	1
11	自由曲 1 曲以上を選曲	0
		計 64 名

【改訂前】のグレード 4 に相当する曲目を【改訂後】はグレード 5 に設定することで，学生達が取り組みやすい曲目を増やした．曲の難易度が上がるということは時に学習意欲を損なう可能性もあるが，今回の改訂によって学生達の難易度に対する抵抗感を軽減し，自身の演奏技術の向上を実感できる選曲となっていることが確認された．

グレード 5 の曲目からは，前述のギロック作曲《サラバンド》と《フランス人形》が複数選ばれている．ギロックの作品は，先に述べた通り【改訂前】はグレード 4 に相当していた曲目で，ペダルの使用や，スタッカートやアルペジオ，手の交差といった新たな技法を用いられており，グレードをひとつ上げることで，今までよりもさらに音楽的に豊かな表現による，余裕のある演奏に変化してきているところが特徴的である．その点において 1 段階上のグレードに設置した目的が達成されていると言えるだろう．

グレード 6 以上では，同じ作品を選択した学生がいない点が特徴である．教員側から意図的に被らないよう指導した訳ではなく，教員と学生が相談の上，学生の意思により決定された．学生が自身の進度を把握し，音楽的な好みを明瞭に教員に伝えていることがうかがえる．学生達自身が個々の演奏技術の向上を目指すことが可能であることは【改訂前】と変わらない点であるが，保育の現場で使用することが可能な作品を多く取り入れている点，無理なく次の段階へと進むことができ，且つ初心者であるほど実習に役立つ曲目を習得することができる点が【改訂後】の選択曲の特徴である．その狙いは発表会で演奏された作品の傾向に反映されていると言える．これらのことから，今回のグレード改訂はスムーズな移行をたどっていると思われ，この改訂内容を継続的に使用することで，新たな課題が見えるのではないかと推測される．

4. まとめ

本論の目的は，本学おける音楽関連科目のカリキュラムとピアノ指導法の改善点について改善内容と現状の経過報告をすること，および，改善した内容についてさらに改善する必要性の有無を考察することであった．

第 1 の目的であるカリキュラムとピアノ指導法の改善については，グレードの改訂という方法で提示した．「2-1『バイエル・ピアノ教則本』からの課題曲の改訂」から「2-3『ブルクミュラー25 の練習曲』以降の課題曲の改訂および学習の意義」，「3-1 グレード認定課題曲の改訂方針」において，改訂の内容と学習の意義について検討し，着実な実力を習得することが期待できる改訂であるという結論を得た．ただし，その優位性については 2 年生で履修する「保育内容（表現・音楽）」における弾き歌いで例年みられるつまずきが，例年通りにみられるのか，あるいは軽減されるかまでは授業が実施されるまで判明しないため，来年度の課題とする．

第 2 の目的である，改善した内容についてさらに改善する必要性の有無を考察すること，については，「3-2「音楽Ⅰ」における発表会で演奏された作品の傾向と改訂の意義」で明らかにした通り，発表会時点におけるグレード 2 の学生数が 64 名中 15 名であること，グレード 3 以上の多くの学生が「音楽Ⅱ」の単位を取得する見込みが高いことを踏まえると，ピアノ学習に対する学生の意欲は高く保つことが出来ていると言うことができ，現時点では改訂によるマイナス要因は見られない．選曲も幅広く，学生が主体的に自身の好みに合う作品を選曲している点が重要である．これらのことから総合的に判断すると，現時点ではさらなる改訂の必要性はみられない．ただし，継続的に【改訂後】のグレードを使用する中で，グレード 2 あるいはグレード 3 を習得する学生の数に変化が生じる場合や，発表会における選曲作品に偏りが見られる可能性がある．その場合には改訂する必要があるだろう．今後は，この【改訂後】のグレードを継続的に使用し，その経過観察行いつつ，さらなる改善の必要性の有無を検討し続けていきたい．

注釈

注 1）2019 年度入学生より「保育（表現・音楽）」は「保育内容（表現・音楽）」として実

施される．

注 2)『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　音楽編』によると，「内容の取扱い」「イ　共通教材」として、各学年 4 作品、計 24 作品が指定されている[10]．

注 3）国立情報学研究所：「CiNii Articles - 日本の論文をさがす」「保育　ピアノ，　2019」https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E4%BF%9D%E8%82%B2%E3%80%80%E3%83%94%E3%82%A2%E3%83%8E%E3%80%80&range=0&nrid=&year_from=2019&year_to=2019&count=20&sortorder=1&type=1　（2020.1.22）

注 4）61 件には前掲の拙稿も含まれている．

注 5）原著は次の通りである．Ferdinand Beyer: *École Préliminaire de Piano*, Mainz, Schott（1850）．その初版は解説付きファクシミリにてすべてのページが掲載されている．安田寛（監修），小野亮祐，多田純一，長尾智絵：『『バイエル』原典探訪: 知られざる自筆譜・初版譜の諸相』音楽之友社（2016）

引用・参考文献

1）多田純一，紺谷志野：「奈良佐保短期大学における音楽教育関連科目のカリキュラムに関する一考察：保育者および小学校教員養成機関におけるピアノ指導法」，『奈良佐保短期大学研究紀要』，26，pp.25-33（2019）

2）1）と同稿，p.32

3）1）と同稿，pp.25-26

4）和田垣究，生地加代，藤谷智子，澤田和夫：「幼稚園教諭・保育士に求められるピアノ技能について：園長への調査結果に基づいて」，『武庫川女子大学　学校教育センター年報』，3，p.178（2018）

5）別府祐子，大野内愛：「学習の継続によるピアノ学習のコスト認知の変容 ：保育者・教員養成課程における学習に着目して」，広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学講座『音楽文化教育学研究紀要』，31，p.50（2019）

6）5）と同稿，p.51

7）三宅浩子，早川純子，井上浩義，中池順子，中村佳代子：「保育者に求められる音楽力を培う連携を目指して：現場と養成校・協働研修の意義と成果」，『宮崎学園短期大学紀要』，11，p.95（2019）

8）7）と同稿，p.97

9）緒方満：「保育者・教員養成系大学における音楽教育実践の課題と展望(1)比治山大学現代文化学部子ども発達教育学科の「音楽Ⅰ・Ⅱ」の実践より」，『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』，5，p.51（2019）

10）文部科学省：『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　音楽編』，pp.164-165，東洋館出版社（2018）